横浜国立大学附属図書館

ISSN 0917−270X

館報

Nov. 2002

No. 51

The Yokohama National University Library Bulletin

目　次

世界と伴走する図書館（梅本　洋一）…… 1

ーシリーズ　電子ジャーナル　第３回ー
　電子ジャーナルの風景（青木　利根男）…… 3

教官寄贈図書リスト …… 5

平成13年度購入主要コレクション等 …… 6

図書館に関する会議・主要日誌・職員の動向 …… 7

世界と伴走する図書館

梅　本　洋　一

私は映画批評を書く。依頼された文字数と、依頼の趣旨を考えて文章を綴るのは当然としても、それ以前に、どうしても行わなければならないことがある。それは資料蒐集と呼ばれる作業だ。当該の映画作品について他の批評家たちはどんなことを書いているのか？

その映画を撮った監督の他の作品にはどんなものがあるのか？　文章を書き始めるときに様々な前提が必要になる。私は、そうした作業をもう二十年以上も繰り返している。だが、この二十年で、その作業をする方法はめまぐるしく変化した。他の批評家たちがどんな内容の文章を書いているのかを調べるために、かつてなら外国の雑誌を数多く定期購読し、その中で参考になる文章を見つけだすまでに相当の時間がかかった。机の上に大量の雑誌が置かれる。外国語で書かれた文章を読むためには当然辞書の数冊は必要で、それも机の上に置かれる。メモを取るために雑紙もいる。フィルモグラフィーを調べるために、映画作品事典の日本語版、英語版、フランス語版がいる。事典は大判で厚いので、私の一八〇×八〇というかなり大きな机は、すでに一杯だ。原稿を書くためにどうしても必要な原稿

用紙（B5版）を置くべき場所はもう見つからない。そんな状態が八年続き、まず原稿用紙と筆記用具の代わりにワードプロセッサーが導入され――長年欧文タイプライターに親しんでいた私は「ワープロ」の導入で原稿を書くのが画期的に早くなった――、十年目にコンピュータが導入された。マッキントッシュのクラシックという機種で、ハードディスクも外付けでその容量

も二十ＭＢしかなかったが、ボーナスのほとんどが費やされたのを覚えている。やっと日本語対応になったばかりのマッキントッシュのインプットメソッドは変換効率が悪い上に遅かった。そしてそれから二年後、進化したマッキントッシュのコンピュータにメールが繋がれ、インターネットにアクセスできるようになった。

文章を書くことにまつわるそうした環境の変化に対応するように、机の上の空間も激変した。まず机の上に置かれるものの数が圧倒的に減った。メモ用紙はもう要らない。筆記用具も要らない。個人的に雑誌が好きなので、購読する冊数は変わらないが、机の上に置かれるものは減っていく。辞書や事典の代わりに数枚のＣＤ-ＲＯＭが置かれるようになる。常にネットに繋がれた状態で、フィルモグラフィーの検索など、重い事典を上げ下ろししなくても行えるようになる。参考文献は各国の検索ソフトで容易に見つかり、その一部を読むこともできるようになる。世界各地で行われている映画祭で知り合った映画監督たちに質問があれば、手紙を書き航空便で送り、いつ来るか知れぬ返事を待つ代わりに、電子メールを送り、容易に返事がもらえるようになった。個人的に信頼に足る批評家の文章は雑誌等に掲載される以前にメールの添付文書で送ってもらい読むことができるようになった。私個人に関わる原稿執筆の環境は、この十年で革命的に変化した。（その是非を問う暇はないが）世界のグローバリゼーションと私の個人的な環境の変化は完全に対応している。それまでの地縁、血縁、社縁に基づいた私の人間関係も大きく変化した。千キロ以上離れた場所に住む友人と世界のいろいろな場所で会食する回数の方が、同じ区内に住む親戚と会う回数を大きく上回るようになった。かつて私は私の机の上に「世界」という環境を仮構して、その上で思考を始めたのだが、今、マッキントッシュの小さなパワーブックを立ち上げるだけで、「世界」が私のいる空間に勝手に侵入を始めている。

そうした変化に図書館も無縁でいられるはずはない。考えてみれば、かつての図書館のコンセプトは、十年以上前の私の机の上のようだ。多くの紙媒体の資料を収集し、それを置いておく場所だった。学生時代の私は、図書館で自分の場所を見つけると、小さな机の上にたくさんの資料を積み上げたものだ。小さな机の上に所狭しと置かれた資料の山は、そのまま図書館の書庫の雛形かもしれない。もし図書館が、かつてそうあったように資料の収蔵庫のままでよいとしたら、毎年累積した資料でどんなに広い書庫もすぐに悲鳴を上げてしまう。あるいは、かつて最良とされていた辞書は厚くて大きくて重いものだったが、その厚くて大きくて重い辞書がＣＤ－ＲＯＭ一枚になっている。厚い壁に囲まれた建築物の中で、テーブルに付けられた灯りを頼りに、「世界」に触れ合う空間だった図書館。壁という壁は情報で塗り込められ、外部に広がるはずの真の「世界」と空気が通底しなくなったような空間。もしここ十年ほどの世界の変化に図書館が対応しないならば、書庫が埋まるという具体的な問題以上に、世界との触れ合いを欠いた閉塞的な暗い倉庫に変容してしまうだろう。その暗い倉庫の中には、もちろん世界の息吹と触れ合うほどに強度のある情報が存在しているかもしれないが、その暗さゆえに、ジャンクされても仕方のない不要な紙くずと区別がつかなくなる。薄暗く静寂で、「世界のすべての記憶」が詰まったような運動感を欠いた場所から、世界と通底する窓のような空間に図書館が生まれ変わるならば、使用価値を欠き、忘れ去られるのを待つだけの沈殿した固まりとしての記憶が、現在の世界の中でリサイクルされるべき有益な原料に見えるはずだ。そのためにはまず図書館というものが持ってきたコンセプトを改めねばならないばかりか、図書館という空間そのものを新たなコンセプトに似合うものに改編していかなくてはならない。外部と内部を隔てるために設置された厚い壁は、まず取り壊されなければならない。そこに設置されるのは、外部と内部が通底するような透明なガラスだ。紙媒体の資料の収集がいずれ行き詰まるのなら、世界各地に点在する図書館のどこにその資料があるかを明らかにする方策を講じればよい――もちろんインターネットはそのもっとも適切な手段であることは言うまでもない。多様な情報が忘れ去られるためではなく、リサイクルされることを目的に収集されるのだとすれば、収集された情報を加工して再発信する場所に図書館が変貌しなければ、すべての記憶は忘却の彼方に立ち去るしかなかろう。多くの原料が運び込まれ、それが加工されて、新たな製品を生み出す工場のような場所に図書館は変わらねばならない。

今から二十年以上前の話だ。私がフランス留学中、日本人の友人たちの多くはＢＮと呼ばれる国立図書館に通い、特別資料室で貴重な資料を相手にメモをとっているとき、私はもっぱら開架式のポンピドゥー・センターの図書館に通っていた。一九七七年にパリの中央に出現したレンツォ・ピアノ設計による「前衛的な」鉄とガラスだけで造られた巨大な建築物には、映画館やビデオテーク、コンサートホールや図書館といった多様な施設が併設され、七十年代末期の開館直後という時点ですでに入口近くの雑誌コーナーには、最新刊の「週刊新潮」や「朝日ジャーナル」まで置いてあった。そして開館以来二十年が経ちリニューアルにあたっ

て最上階のレストランまでが一流のインテリア・デザイナーの手によって改装され、パリの名所になっている。ガラス張りの意匠はそのまま残され、このレストランからは、パリのすべてが見渡せる。そして十九世紀中葉のオースマンの都市改革による名作のひとつであったＢＮもまたその所期の目的を終え、ドミニク・ペロー設計による二十一世紀型の図書館に生まれ変わっている。ＢＮでは版権の切れた資料を次々にディジタル化して、ＢＮサイトにアクセスすればいつでも読めるような体勢を作りつつある。

改装中の本学附属図書館の前を通ると、ガラス張りのファッサードがすでに完成している。本学に職を持つ私たちスタッフは、この附属図書館が将来にわたって世界と伴走する場所になって欲しいと心から思っている。

（うめもと　よういち　教育人間科学部教授）

－シリーズ電子ジャーナル第３回－

電子ジャーナルの風景

青木　利根男

はじめに

シリーズ電子ジャーナルでは、第１回、第２回と本学で利用できる電子ジャーナルの利用についてご紹介してきました。電子ジャーナルについては、研究室のＰＣから図書館のホームページを通して利用できますので既に利用した方も多いと思います。まだ、使ったことのない人は是非図書館ホームページを尋ねて下さい。図書館や総合情報処理センター、学部のサテライト端末から学生でも利用できます。

ところで、この電子ジャーナルが本学でもある程度利用できるようになったのは、実はそれほど古い話ではありません。まだ、３～４年の話です。そのこともあって後で述べるようにその導入財源は必ずしも安定しているわけではありません。

第３回は、このような電子ジャーナルを本学に導入するための問題点と、広く学術情報の流通とういう面から見た新しい動きを紹介したいと思います。

電子ジャーナルの登場

電子ジャーナルの導入が、大学にとって重要だと認識され、日本のどの大学図書館もその導入に向けて腐心するようになったのは、概ね４年くらい前、すなわち平成11年（1999年）頃からと考えられます。

当時は、自館で所蔵している紙媒体資料を如何に電子化してインターネット上で利用できるようにするか、ということが電子図書館的機能に関する大学図書館の主な関心事でした。このことは、もちろん今でも大きな課題にかわりはありません。

しかし、1999年頃から、アカデミックプレスやエルゼビアサイエンスといった商業出版社が、それぞれの電子ジャーナル商品を日本で本格的に発表するに及んで、電子ジャーナルを如何に導入していくかが、どの大学図書館にとっても大きな課題となりました。

今までの印刷体の雑誌に比べて、新しいメディアである電子ジャーナルの便利さは、誰にとっても明かでした。その速報性、インターネットに接続できるパソコンがあれば24時間どこでもそして同時に誰でも利用できる便利さはすぐに理解されました。

また、そのような機能を持ったジャーナルを有力で権威ある学術雑誌を多数かかえる大手商業出版社が全面的に市場に提供しはじめたため、これをどれだけ利用できるか、その導入のためにどれだけ投資できるか、はまさしく大学全体の学術研究基盤としての情報の格差に直結するだろうということもその状況を知る者にとって容易に直感できることでした。

印刷体の場合には、その購入に多額の投資をしても、その保管場所、利用人数、利用時間、利用場所など制限がありましたから雑誌の購入タイトル数の差は利用の便利さに必ずしも直結せず、また、個々の研究室は自身の専門分野の雑誌があれば大学全体の雑誌所蔵数の多寡を気にする必要もなかったので、購入タイトル数がすぐに組織の情報格差につながるとは必ずしも強く認識されなかったように思われます。

しかし、大手出版社の電子ジャーナル商品の登場は、このジャーナルの問題を個々の研究室の問題から研究組織としての基盤的問題へと大きく変質させました。電子ジャーナルが大学全体の情報格差につながりかねないという感覚は、多くの大学図書館が電子ジャーナルを導入しようとする動機の一つとなりました。

雑誌の危機（シリアルズクライシス）

一方、従来の印刷体の学術雑誌購入についても問題がありました。

外国雑誌の購入は、毎年秋頃に次年度の購読タイトルを仮予約しますが、その購入価格は、雑誌の原価のほか、為替レートによって決まります。

雑誌原価の毎年の値上がり、為替レートの変動は、購入する研究者や図書館担当者にとって今でも年中行事となっている悩みの種です。度重なる値上げのため従来購入してきたタイトルを中止する研究室もめずらしくありません。

こうした値上りに拍車をかけているのが、外国出版社の吸収・合併です。ある出版社を吸収合併した会社が何年もしないうちにまた別の会社に吸収されることも珍しくありません。最近では、エルゼビアサイエンス社によるアカデミックプレスの統合が身近な例でした。

このような状況の一方で、学術雑誌を購入するための予算は頭打ちの状態が続いています。

学術雑誌の内容はそもそも研究者が生み出した研究成果であり、別の研究者がこれを参照しながらまた新たな研究成果を生み出していくための手段として生まれたものですが、現状は、商業出版社の商品として研究者がかなりの経費をかけてもなお利用に不自由な状態になっています。

このような学術雑誌の状態を表すために、欧米図書館の間では「雑誌の危機（シリアルズクライシス）」という言葉が使われました。

電子ジャーナルの導入は、こうした状況の解消にもつながると考えられました。

なぜ、そのように考えられたかは、電子ジャーナル商品の特徴に理由があります。

電子ジャーナルの商品としての特徴

大手出版社が提供する電子ジャーナル商品には、メディアとしての特徴に加えて、その提供方法に関わるいくつかの特徴があります。

まずメディアとしての特徴ですが、言うまでもなくネット上で利用する商品であるということです。利用者は個々の印刷誌面をみるのではなく、世界のどこかにあるサーバコンピュータに蓄積されたジャーナルの記事内容を検索システムを通じてインターネット上で利用します。印刷体の場合には、ある雑誌は一時に一人しか利用できませんが、電子ジャーナルの場合には、場所空間を問わず、アクセスがしかるべく認可されている場合には何人でもサーバー上に登録されると同時に手元のＰＣ画面で見たりダウンロードできるわけです。

また、この特徴は、便利さの一方で、蓄積された電子コンテンツを継続的に利用するための確かな保存体制をどうするかというアーカイブ機能の問題にもつながっています。

次に、主に提供方法、販売方法に関する特徴です。

その第一は、出版社の多くが、自身の電子ジャーナル商品を個々のタイトル毎ではなく、自社発行のジャーナルをすべて含む形のパッケージ販売とした点です。このことは、従来、個々の研究室が自分の専門分野のタイトルだけを購入する方式で対応してきた印刷体の場合と異なる状況です。大手出版社の電子ジャーナルパッケージは百から千の単位のジャーナル数を含んでいますから、内容的にも個々の研究室に対応するものではなくなりました。それは、各専門の相互影響によるユニバーシティの機能に対応するものと考えることはできますが、実際には、自分の研究分野に直接関係のない分野のジャーナルも多数含まれている新しい商品に対して自身の少ない研究費をどう対応させればよいのか課題です。

第二は、パッケージ化されたために当然とも言えますが、個々の印刷体のタイトルを購入する場合に比べるとかなり高額の利用料が必要であるという点です。これは、印刷体の維持にも苦労している研究室経費では対応困難な額です。このため、学内的に新たな財源の確保が必要となり、附属図書館運営委員会でもここ数年議論していますが、その商品の最終的な価格モデルがまだ将来に向かって不確定で安定的になっていないこともあって、既存の予算配分システムの中で未だ安定的な位置付けを得るには至っていません。

しかし、このまとまった金額を何らかの形で学内的に用意できれば、同じ金額で印刷体を購入するよりも多くのジャーナルのコンテンツを利用できるというメリットもあることから、電子ジャーナルを導入することは現時点での限られた資料費予算の効果的な使い方であると考えることができます。これも、各大学図書館で電子ジャーナルの導入を進めている理由の一つとなっています。

第三は、電子ジャーナルの契約にあたってはコンソーシアムによる契約が行われているという点です。

電子ジャーナルという新しい商品はその対価と享受できる利益の対応が必ずしもまだ確定しているわけではなく、その意味で定価はありません。このため、大手商業出版社の電子ジャーナルの販売方式に対して、欧米では、利用サイドの図書館がコンソーシアムを形成し、交渉の上、電子利用のメリットを可能な限り引き出そうという動きが一般的となりました。日本においても国立大学図書館協議会の電子ジャーナルタスクフォースが、この問題に積極的に取組み、外国の出版社と直接交渉して利用条件が不利にならないよう活動をしています。

本学において利用している電子ジャーナルもこのような交渉の中で獲得された価格・利用条件によって導

入しているものです。

最後に、特徴というよりも問題といった方がよい点にも触れる必要があります。それは、現在主流の販売方法では、電子利用の条件として印刷体の購読の維持が前提になっていることです。

これにより、各研究室等は従来の冊子体雑誌の購読をキャンセルせずにできるだけ続ける必要があります。このことは、複雑な価格モデルとあいまって財源負担の方法を難しいものにしています。

図書館機能の変化と学術コミュニケーションをめぐる新たな動き

電子ジャーナルの導入は、実務を担当する図書館の業務のあり方にも影響を与えました。と言うのも、図書館が行っていた学術情報の収集業務は、購読申込を受けての事務的業務から、電子ジャーナルという複雑な価格構成でかつ変化の途上にある商品を扱うことによってその予算財源の確保をめぐって一挙に複雑な学内調整、対外的な連絡協力を要する業務へと様変わりしたからです。

このようにして、コンソーシアムを形成して商業出版社の電子ジャーナル導入を有利に進めることは、大学にける学術情報基盤の整備とともに、印刷体雑誌の購入頭打ちという前述の「雑誌の危機」状況の打開策としての機能を果たしています。しかし、一方で相変らず学術論文の激増に伴う電子ジャーナルの値上げ要因は残るとともに、学術コミュニケーションの主導権が商業出版社にある状態に根本的な変わりはありません。

このことから、コンソーシアムによる電子ジャーナルの導入とは別に、学術雑誌が本来持っていた学術コミュニケーションの機能を適正な形に戻すあるいは新たにあるべき姿を見出すための動きが欧米で始まりました。

そのうちの２つを最後に簡単に紹介します。

一つは、物理学ないしは数学などの分野では良く知られていると思われますが、「e-Print archive」と呼ばれる研究者による自主的論文登録利用システムです。アメリカのロスアラモス国立研究所で始められたシステムで、研究者はインターネット電子アーカイブに自分の研究論文（プレプリント）を登録し、それを他の研究者が引き出して利用するというものです。
ここでは、学術情報の流通に大手出版社が入っていない点で、従来の学術雑誌と違う新しい情報流通のあり方を提示しています。

もう一つは、やはりアメリカの有力大学の図書館で組織する「アメリカ研究図書館協会」（通称：ＡＲＬ）の呼びかけで発足したＳＰＡＲＣ（スパーク）と呼ばれる組織的活動です。これは、Scholarly Publishing and Academic Resources Coalition（学術出版と大学資源の協力）と呼ばれるもので、学術出版の世界に競争を持ち込むことで大手出版社の寡占状態を是正するためことを目的に、例えば学協会と協力して既存の有力商業誌に競合するような新規タイトルを創刊する活動などを行っています。日本でも国立大学図書館協議会が国立情報学研究所とともにこうした活動の開始について準備を進めています。

1665年ロンドンで創刊されたというPhilosophical Transactionsから始まった印刷体の学術雑誌による学術情報の伝達流通システムは、ＩＴ化の中でいよいよ新しい段階に入っていると言えるようです。

（参考文献等）
『情報の科学と技術』52巻２号、52巻５号、2002
e -Print archive: http://arxiv.org/
ＳＰＡＲＣ: http://arl.org/sparc

（あおき　とねお　附属図書館情報管理課長）

教官寄贈図書リスト

平成14年10月31日までに本学教官の方々から寄贈していただきました著書・編書を紹介します。ご恵贈ありがとうございました。リスト上の配列は寄贈者の五十音順で、所属部局は原則として最新のものです。

石原　修（工学研究院･教授）
『現代物理科学：フェムトからハッブルの世界まで』
石原　修著
共立出版, 2001.11

泉　宏之（経営学部･助教授）
『ケースブック簿記会計入門』泉宏之著
新世社 - サイエンス社（発売）, 2002.7

浦野紘平（環境情報研究院･教授）
『みんなの地球：環境問題がよくわかる本』浦野紘平著

オーム社, 2001.2
『化学物質のリスクコミュニケーション手法ガイド』
浦野紘平編著
ぎょうせい, 2001.9

大門正克（経済学部･教授）
『民衆の教育経験: 農村と都市の子ども』大門正克著
青木書店, 2000.5
『民衆世界への問いかけ』大門正克編
東京堂出版, 2001.10

大矢　勝（教育人間科学部･助教授）
『石鹸安全信仰の幻』大矢勝著
文藝春秋, 2002.7

北山　　恒（工学研究院･教授）
『On the situation : Koh Kitayama 1993/95-2002』
北山恒著
TOTO出版, 2002.3

小池文人（環境情報研究院･助教授）
『移入･外来･侵入種 : 生物多様性を脅かすもの』
小池文人著
築地書館, 2001.12

近藤正幸（環境情報研究院･教授）
『大学発ベンチャーの育成戦略 : 大学･研究機関の技術を直接ビジネスへ』 近藤正幸著
中央経済社, 2002.3

坂田　宏（経営学部･助教授）
『民事訴訟における処分権主義』坂田宏著
有斐閣, 2001.12

笹井　均（国際社会科学研究科･教授）
『資産運用の最先端理論』笹井均, 浅野幸弘編
日本経済新聞社, 2002.3

薩本弥生（教育人間科学部･助教授）
『衣生活の科学』 薩本弥生執筆
放送大学教育振興会, 2002.3

佐藤寿邦（工学研究院･教授）
『Excel VBAによる化学プログラミング』佐藤寿邦著
培風館, 2002.7

須川英徳（教育人間科学部･助教授）
『韓国を歩く』 須川英徳編
勉誠出版, 2002.7

高野義郎（工学研究院･名誉教授）
『古代ギリシアの旅 : 創造の源をたずねて』高野義郎著
岩波書店, 2002.4

垂水千恵（留学生センター･教授）
『呂赫若研究 : 1943年までの分析を中心として』
垂水千恵著
風間書房, 2002.2

西村尚史（教育人間科学部･助教授）
『特異点と分岐』 西村尚史著
共立出版, 2002.1

野村秀敏（国際社会科学研究科･教授）
『予防的権利保護の研究 : 訴訟法学的側面から』
野村秀敏著
千倉書房, 1995.12
『保全訴訟と本案訴訟 : 被保全権利の審理を中心として』
野村秀敏著
千倉書房, 1981.12

吉原健一（工学研究院･名誉教授）
『Random sums, extremes sequential analysis』
吉原健一著
SANSEIDO, 2001

平成13年度購入主要コレクション等

1.**「家の光」**復刻版　1925～1949,1935～1941（都市版）
　産業組合中央会の機関誌として創刊され、農村生活の向上と自立、協同精神を育むことを加味した家庭総合誌。
[中央図書館１号館３階雑誌開架]

２．**石川一郎文書**（東京大学経済学部図書館所蔵）
化学工業統制会・化学工業連盟編　マイクロフィルム版（78リール）
　戦中戦後において日本財界の重鎮であり、初代の経団連会長を務めた石川一郎が関係した経済団体の会議録、政府機関や諸団体、企業などとの対応録を集成したもの。
[中央図書館１号館１階特殊資料室 289.1‖IS]

３．**近代日本のアート・カタログ・コレクション**
復刻版　内国絵画共進会ほか５団体主催　25巻
　明治期から昭和初期にかけて開催された主要な美術団体の展覧会資料を集成したもの。
[中央図書館２号館１階書庫 706.9‖KI]

４．**Ryukyu studies : Western encounter** ; Pt. 1 & 2, each 5 vols. / ed. P. Beillevaire. Reprint ed.
和文書名： 西洋の出会った大琉球
16世紀の初期から第２次世界大戦前までに西欧、

米国で発行された雑誌に掲載された研究、記事及びアジア･太平洋の紀行書から琉球関連の記述を約190点抜粋し、集成したもの。
[中央図書館１号館２階開架 219.9‖RY]

５．**戦時・戦後復興期住宅政策資料　住宅営団**；全６巻16分冊
住宅営団は戦後ＧＨＱによって閉鎖され、関係資料は処分されたが、当時の営団関係者が所蔵していた資料から、戦時・戦後住宅政策に関連したものを編集・構成したもの。

[中央図書館２号館１階書庫 365.31‖SE]
(所在情報は平成13年度のもの。新中央図書館開館後は変更があります。)

図書館に関する会議

（平成14年３月１日～10月31日）

運　営　委　員　会

平成13年度第６回（３月15日）
＜審議事項＞
１）平成15年度概算要求について

平成14年度第１回（５月17日）
＜審議事項＞
１）横浜国立大学附属図書館文献複写料金徴収猶予取扱細則の一部改正について
２）平成14年度附属図書館事業計画について
３）平成15年度電子ジャーナルの購入計画について
４）附属図書館中期目標・中期計画について
５）平成14年度教育研究高度化経費及び学長裁量経費の要求について
６）平成14年度附属図書館図書館資料選定小委員会の設置について

臨時（６月14日）
＜審議事項＞
１）学長裁量経費の要求について
２）平成14年度予算編成の基本的考え方について

平成14年度第２回（７月19日）
＜審議事項＞
１）平成13年度附属図書館決算について
２）平成14年度附属図書館予算について
３）平成15年度の電子ジャーナルサービスについて
４）中期目標・計画の策定について

臨時（７月30日）
＜審議事項＞
１）平成14年度学生用図書経費の補填について
２）平成14年度資料費予算（案）について
３）平成15年度電子ジャーナル購読について

平成14年度第３回（９月20日）
＜審議事項＞
１）企画委員会について
２）附属図書館中期目標・中期計画（案）について
３）平成14年度学生用図書購入費について
４）資料収書計画の見直しについて
５）平成15年度電子ジャーナルサービスについて
６）電動集密書架の設置について
７）一般市民等学外者への図書資料の貸出（試行）の実施について

図書館資料選定小委員会

平成14年度第１回（６月14日）
＜審議事項＞
１）平成14年度附属図書館図書館資料収書計画について
２）平成14年度学生用図書及び教養教育図書の選定について
３）平成15年度自然科学系外国雑誌の購入について

平成14年度第２回（10月18日）
＜審議事項＞
１）平成14年度附属図書館資料費予算について

主　要　日　誌

（平成14年３月１日～10月31日）

3. 8　日本図書館協会大学図書館部会（一橋大学）
3. 14　神奈川県図書館協会第３回理事会（神奈川県立図書館）
3. 15　神奈川県図書館協会大学図書館委員会（神奈川大学）
3. 27　神奈川県内大学図書館相互協力協議会（専修大学）
4. 16　電子ジャーナル・タスクフォース（東京大学）
4. 26　第58回関東地区国立大学図書館協議会総会（総

合研究大学院大学）
4.26　神奈川県図書館協会第１回理事会・総会（神奈川県立図書館）
5.10　神奈川県図書館協会大学図書館委員会（相模女子大学）
5.21　国立大学附属図書館事務部・課長会議（学術総合センター）
5.23　電子ジャーナル・タスクフォース（東京大学）
5.23　横浜市内大学間学術・教育交流協議会拡大実務連絡会（神奈川大学）
5.24　神奈川県内大学図書館相互協力協議会（東海大学）
6.4　神奈川県図書館協会広報委員会（神奈川県立図書館）
6.26-27　第49回国立大学図書館協議会総会（鳥取県立県民文化会館）
7.4　電子ジャーナル・タスクフォース（東京大学）
7.11　神奈川県図書館協会広報委員会（神奈川県立図書館）
7.12　横浜市内大学図書館コンソーシアム設立検討委員会（神奈川大学）
7.16　神奈川県図書館協会大学図書館委員会（鶴見大学）
7.18-19　関東地区国立大学図書館研修会（茨城大学）
7.26　神奈川県内大学図書館相互協力協議会（東海大学）
8.3-4　オープンキャンパス2002
9.5　神奈川県図書館協会広報委員会（神奈川県立図書館）
10.4　横浜市内大学図書館コンソーシアム設立検討委員会（神奈川大学）
10.9　神奈川県図書館協会広報委員会（神奈川県立図書館）
10.10　国公私立大学図書館協力委員会シンポジム（慶應義塾大学）

職員の動向

（平成14年３月１日～10月31日）

転　入

（３月１日付）
情報サービス課参考調査係
（新採用）　堀金佐知子

（４月１日付）
事務部長
（都城工業高等専門学校事務部長）　立原　敏
情報管理課総務係長
（国文学研究資料館管理部会計課）　伊藤　陽子
情報管理課システム管理係
（新採用）　高田　博志
情報サービス課資料サービス係
（新採用）　戸叶　郁子
情報サービス課参考調査係
（新採用）　立石亜紀子

（４月16日付）
情報管理課雑誌管理係
（新採用）　相沢　雅帆

（７月１日付）
情報管理課総務係
（新採用）　福原　歩

館内異動

（４月１日付）
情報管理課図書管理係長
（情報管理課雑誌管理係長）　大金　聡男
情報管理課雑誌管理係長
（情報管理課図書管理係長）　大石　博昭
情報管理課システム管理係長
（情報管理課システム管理係）　小池　正利
情報サービス課資料サービス係長
（情報管理課システム管理係長）　柾川　俊明
情報サービス課相互協力係長
（情報サービス課参考調査係）　片山　叔子

転　出

（４月１日付）
学務部学生支援室専門職員
（情報管理課総務係長）　今井　純

退　職

（３月31日付）
（事務部長）　池上　彰一
（情報管理課雑誌管理係）　村山　実子
（情報管理課雑誌管理係）　小野寺千生
（情報サービス課資料サービス係長）　遠藤　肇
（情報サービス課資料サービス係）　小塚　聡子
（情報サービス課相互協力係長）　松下　敬子

（６月30日付）
（情報管理課総務係）　深川　裕美

横浜国立大学附属図書館　**館報**　No. 51　平成14年11月１日
発行所　横浜国立大学附属図書館　**編集**　附属図書館広報委員会
〒240-8501　横浜市保土ケ谷区常盤台79番６号　電話　045-339-3204
ホームページ　URL＝http://www.lib.ynu.ac.jp/